

# 原稿付き中日同時通訳における順送り訳と 倒訳の使用に関する事例分析 — 中国・温家宝首相日本国会演説を例に —

丁紀祥

(大阪大学大学院・人間科学研究科博士後期課程)

*Linear translations have been considered as the most desirable method for simultaneous interpretations. The author, however, questions the possibility of linear translations for simultaneous interpretation between Japanese and Chinese, because the positions of verbs of each language are very distant. With this in mind, this paper analyses simultaneously interpreted materials from Chinese into Japanese and epitomizes some examples of “Translation in reverse order” and “Linear translation” by comparing the original draft of the speaker and the interpreted one by the interpreter. The findings in this case study will be useful for the people considering specifically the teaching method and the self-training measures of the simultaneous interpretation skills between Chinese and Japanese.*

## 1. はじめに

中日両言語の文構造の差異は、中日同時通訳の際の最大の難所となる。中国語と日本語の語順はもともと異なるもので、中国語は SVO (主語+動詞+目的語) という構成であるのに対し、日本語の文構成は SOV (主語+目的語+動詞) となる。すなわち日本語には、動詞が文の最後に位置するという特徴がある。それゆえ、中日同時通訳を行なう際に同時通訳者は、中国語の発話の動詞を先に聞き、まずこれを記憶に入れておき、その後目的語を聞いてから、記憶にある動詞を取り出し、動詞と目的語を目標言語である日本語の文構造にあわせて適当な位置に入れるという作業を行なう。起点言語の中国語の動詞が出た瞬間から、つぎに目的語が出てくるまでの間隔があまりに長いと、聞き漏れや訳漏れなどにつながる可能性が相対的に高くなる。

同時通訳という作業は、情報が出てきた順序に従って通訳していくのが最も望ましい方法であろう。順次に訳出すれば、通訳者にとって記憶の負担が少なく、情報の再編集に工夫を

---

Ting Chi Hsiang, “A Case Study about Using a Linear Translation and a Reverse Order Translation for Simultaneous Interpretation with a Manuscript from Chinese to Japanese: The Speech of Wen Jiabao, Chinese Prime Minister at the Diet in Japan,” *Interpreting and Translation Studies*, No.10, 2010. pages 193-206. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

こらす必要もない。よって同時通訳の手法として最も簡単で、そして最も重用される手法であるといえる。しかし、日本語と中国語のように、文における動詞の位置が異なる両言語間の同時通訳で、果たして順送り訳が可能であろうか。

本稿では筆者が実際に中国語から日本語への同時通訳のビデオファイルを入手し、テープ起こしたものを分析の素材として使うことにした。発話者の原稿と通訳者の訳文を相互に对照・比較することによって、中日同時通訳における「順送り訳」と「倒訳」の通訳手法について検討していく。

## 2. 「順送り訳」と「倒訳」の定義

まず「倒訳」と「順送り訳」について説明する。この二つの通訳ないし翻訳技法はまさに正反対の技法である。詳しく説明すると、以下のとおりになる。

### 2.1 順送り訳の定義

楊承淑は(2001)は順送り訳について次のように説明している。順送り訳とは、原語と訳語の語順・語法を一致させるように訳出していくことである。基本的には原語と訳語の間に存在する語順上の一致点を見出し、その部分を先に訳出する方法である。これが応用できない箇所に対しては「拡充法」や「リンキング」などの方法を用いつつ、不足分を補い、過剰な表現をカットしながら、一文内の語順を調整する。

侯国金(2003)も順送り訳について指摘している。順送り訳は原文の語順に従い、チャンクごとに翻訳・通訳していくことである。必要に応じてセンテンスとセンテンスの間で「溶接」を行う。順送り訳には、素早い・口語的という特徴があることから、通訳や平均的難易度の翻訳に適している<sup>1)</sup>。

ここでの「溶接」というのは、センテンスとセンテンスとのつながりをスムーズにかつ円滑にするために、加訳<sup>2)</sup>などの適度の工夫をいれ、手を加えることである。侯が言及している「溶接」はまさに楊の「拡充法」「リンキング」という方法そのものである。

また、梅得明(2000)は順送り訳の仕方について説明している。順送り訳は一字一句を完全に対応させるように訳すのではなく、文構造の順番・チャンクの順番を合わせるように通訳・翻訳していくことである<sup>3)</sup>。

### 2.2 倒訳<sup>4)</sup>の定義

倒訳とは語や句、センテンスの順序をひっくり返して訳すことである。日中両言語ではもともと語順が違い(中:SVO、日:SOV)、また表現の仕方にも違いがあるので、この技法はとくに重要である(遠藤 1989)。

また、彭士晃(1997)は同時通訳の情報処理手法を観察するために実験を行った。日中通訳者三人を選んで、模擬のシンポジウム大会の録音音声ファイルを流し、同時通訳を行わせた。一回目の同時通訳は、通訳者たちに大会の中心テーマと専門用語を告げただけの状態で行った。二回目は、一回目の同時通訳が終わった後、もう一度テープを聴きなおし、内容について質問・確認をしたうえで、同じ内容を同時通訳した実験結果であった。彭は実験の結

果を分析し、日中同時通訳の情報処理手法について以下の5点を抽出した<sup>5)</sup>。

- ①順次訳出
- ②文末予測
- ③語句倒置
- ④情報再編
- ⑤中性詞の使用

彭はこの五つの手法について以下のように説明している。かりに、原語の情報が1、2、3、4、5の五つであれば、通訳者が情報処理の過程で1～5を全部残らずに訳出するのが一番望ましい。そして伝達の順序として、原語と訳出語の文構造・語順が一致するように通訳する場合、このような状況は「①順次訳出」と定義される。

彭が指摘した「①順次訳出」は「順送り訳」に似ているものである。ここでは、もう少し詳しく定義していく。動詞の位置に小幅の変更があるだけで、大幅な変更・移動がなく、また他の情報（主語や目的語など）については文の全体的な構造に大幅な変更がない場合は、「順送り訳」として判断するものとする。

また、彭は次のように指摘した。かりに通訳者がこの五つの情報をつぎの発話である6、7、8、9、10などの情報の後に置く場合は「③語句倒置」と呼ばれる。この「③語句倒置」はまさに遠藤の「倒訳」と一致しているものであるが、本稿では用語を「倒訳」に統一することにする。

本来の「順送り訳」の意味は、「倒訳」にせざるを得ないパターンも順送りするという通訳方略であるが、今回の事例分析では「倒訳」という通訳方略との対照・比較を行うために、本来の意味での「順送り訳」に限らず、倒訳を必要としないものに対象を限定することが必要となる。つぎに中国語から日本語への同時通訳の素材に基づき、分析を行っていく。

### 3. 事例分析

本稿では、2007年4月に中国の温家宝総理が日本の国会を訪問し、演説を行った際の同時通訳を用いて分析を行う。温家宝総理は衆院本会議場で原稿を読みながら中国語で演説を行った。通訳担当者は中国語の発話を聞き、原稿を見ながら日本語に訳すという、いわゆる「原稿付きの同時通訳」(simultaneous interpreting with script)による同時通訳を行った。演説は同時にNHKで生放送された。今回の同時通訳の担当者は日本語母語話者で、高校から6年半中国に滞在し、日本帰国後は通訳学校で学び、1989年から会議通訳や放送通訳などに従事してきた経験豊富なベテラン通訳者である。筆者は当時の映像のDVDを入手し、自ら温家宝総理の演説と通訳者の通訳をテープ起こしし、文字化した。文字化されたテキストファイルをデータベースに入力し、検索機能などを設定した上で、分析を行った。発話テキストと通訳テキストを対照して、その中で「倒訳」と「順送り訳」の通訳技巧・手法が用いられている箇所について検証した。

#### 3.1 倒訳(Translation in Reverse Order)

前述のとおり「倒訳」の本来の定義としては、順序をひっくり返して訳すことである。しかし日

中両言語間の文法構造の差異により、中国語を日本語に訳す場合は必ず動詞を後置しなければならない。すなわち中国語から日本語に訳す場合、ほとんどすべての文は必然的に「倒訳」になってしまう。それゆえ、「倒訳」についてさらに詳細な分類をしなければ、正確な分析は難しい。筆者は以下のとおり「倒訳」について再分類を試みた。

### 3.1.1 文法的倒訳 (Grammatical Translation in Reverse Order)

日中間の語順の差異に起因する動詞の倒訳、つまり SVO の文構造を SVO の文構造に単に直すだけの状況を、「文法的倒訳」と定義する。一方で「為了～」→「～のために」、「如同～」→「～のように」、「在～」→「～において」のような表現は動詞ではないが、中日両言語の文法規則が異なるがゆえに語順にも差異が生ずる。筆者はこれらもあわせて「文法的倒訳」として定義する。以下は「文法的倒訳」の具体例である。

S08	更想為中日關係的改善和發展盡一份力 做一份貢獻
T08	さらには中日關係の改善と發展の <b>ため</b> に力を尽くし、貢獻したい <b>ため</b> であります
S09	如果說安倍晉三首相去年十月對中國的訪問是一次破冰之旅
T09	安倍総理大臣の昨年 10 月の中国訪問が氷を砕く旅であったと <b>言うならば</b>
S40	值得倍加珍惜, 代代相傳, 發揚廣大
T40	これをいっそう大切にし、子々孫々にわたって伝え、大いに發揚していく <b>べき</b> であります
S51	在一個國家、一個民族的歷史發展進程中
T51	一国、一民族の歴史の發展の過程 <b>において</b>
S87	而是為了汲取歷史教訓, 更好地開辟未來
T87	歴史の教訓を銘記して、よりよい未来を切り開いていく <b>ため</b> であります
S117	只要雙方都嚴格遵循這三個政治文件所確定的各項原則
T117	双方がこの三つの政治的文書に定められた諸原則を厳守し <b>さえすれば</b>
S123	堅決反對台灣當局推行台灣法理獨立和其它任何形式的分裂活動
T123	台湾当局による「台湾の法的獨立」及びその他のいかなる形の分裂活動にも <b>断固として反対</b> します
S144	如果說經濟合作的目標是實現互利共贏
T144	經濟面での協力の目標は互惠とウィンウィンの実現にあると <b>言うならば</b>
S193	為開創中日戰略互惠關係的新局面
T193	中日両国の戦略的互惠關係の新たな局面を <b>切り開くために</b>

以上の例は「文法的倒訳」の実例である。そして今回の分析サンプルの中で「文法的倒訳」が一番多く使われた場面はというと、「必要」の訳である。以下の例を見れば明らかである。

S12	為了友誼與合作，需要繼承和發揚中日友好源遠流長的歷史傳統
T12	友情と協力のために、長い中日友好の歴史の伝統を受け継ぎ、発揚する必要があります
S41	為了友誼與合作，需要總結和汲取不幸歲月的歷史教訓
T41	友情と協力のためには、不幸な歳月の歴史的教訓を総括し銘記する必要があります
S191	開辟中日關係的美好未來要靠兩國政府和兩國人民的不懈努力
T191	中日關係の美しい未来を切り開くために、両国政府と両国人民はたゆまぬ努力をしていく必要があります
S95	為了友誼與合作，需要正確把握中日關係的發展方向
T95	友情と協力のために、中日關係の發展の方向を正しく把握する必要があります
S108	為實現這一目標，需要把握以下原則
T108	この目標を実現するため、次のような原則を把握する必要があります

中国語の「需要」は英語の「NEED」に近く、動詞でもあり、また名詞でもある。ここでは動詞として使われている。しかし日本語に直すと、その品詞性が名詞へと転化する。しかも連体修飾という形で表現されるようになる。仮にこの中国語の「需要」を日本語に訳し、再度中国語に反訳 (back translation) すると以下ようになる。

・「需要」(中国語) → 「～必要があります」(日本語) → 「有～的需要」(中国語)

このように異なる言語の間で、単語が必ずしも同じ形態・品詞性で存在するとは限らない。上記の「需要」の例を見れば明らかであろう。他には、日本語の「好きだ」が形容動詞であることに対し、中国語の「喜歡」と英語の「LIKE」は動詞である、というような例も挙げられる。単語の品詞性が違えば文の構造も変わる。通訳の際は、このような品詞性の違う文・センテンスの処理に気を付けなければならない。そして、日中両言語の文法構造がどれほど異なるものであるか、上記の例からも明らかである。

### 3.1.2 長い文法的倒訳 (Long Distanced Grammatical Translation in Reverse Order)

一般的には、通訳者の記憶の負担にならないように、短期記憶に入れた情報はできるだけ速く産出することが基本である。たとえ中国語の SVO 構造と日本語の SOV 構造の関係から、動詞を文末に移動するために一時的に短期記憶に入れなければならない場合であっても、その情報をできるだけ早く産出することが望ましい。しかし今回の通訳分析サンプルの中には、時間的に、あるいは距離的にかなり長い動詞後置と助詞後置を行っている箇所がいくつも見られる。筆者はこれを「長い文法的倒訳」に分類した。具体的な例は以下のとおりである。

S73	記載了戰爭剛剛結束不久，在交通不便、物資極度匱乏的條件下
T73	そこには戦争が終わって間もない頃、交通がまだ不便で物資が極度に乏しかった中で
S74	中國人民全力幫助 105 萬日本僑民平安返回家園的歷史一幕
T74	中国人民が全力を尽くして 105 万人の残留日本人を無事に帰国の途につかせた歴史的な一齣についてが記されています

S129	只要我們從戰略高度，以長遠眼光和對歷史負責的態度
T129	私どもが戦略的大所高所から、長期的視点に立って、そして歴史に対し責任ある態度で
S130	有誠意、有信心進行對話協商，雙方之間存在的問題總是可以找到妥善解決的辦法
T130	誠意と自信を持って、対話と協議を行いさえすれば、双方の間に横たわる問題を適切に解決する方法を必ず見出すことができます

S131	對於東海問題，兩國應該本著擱置爭議、共同開發的原則
T131	東シナ海の問題については、両国は係争を棚上げし、共同開発する原則に則って
S132	積極推進磋商的進程，在和平解決分歧上邁出實質的步伐
T132	協議の過程をプロセスを積極的に推進し、相違点の平和的解決のため実質的なステップを踏み出し
S133	使東海成為和平、友好、合作之海
T133	東シナ海を平和・友好・協力の海にすべきです

S139	昨天我同安倍首相會談時，一致同意建立中日經濟高層對話機制
T139	昨日私と安倍総理大臣は会談において、中日ハイレベル経済対話メカニズムを設立し
S140	把兩國經濟合作提高到更高的水平
T140	両国の経済面での協力をより高いレベルへ引き上げていくことで一致しました

S153	我們需要以這樣的眼光加強協調與合作
T153	私どもはこのような視点に立って、協調と協力を強化し
S154	共同維護東北亞的和平與穩定
T154	ともに北東アジアの平和と安定を維持し
S155	推進東亞區域合作的進程
T155	東アジアの地域協力のプロセスを推進して
S156	致力於亞洲的振興
T156	アジアの振興に取り組む 必要があります

S157	我們也 <b>需要</b> 以這樣的眼光， <b>共同應對全球性的問題</b>
T157	また、同じ視点に立って
S158	包括 <b>能源安全、環境保護、氣候變化、疾病防護</b>
T158	エネルギーの安全など、また環境保全、気候変動、疾病の予防と抑制
S159	以及 <b>反對恐怖主義、打擊跨國犯罪、防止大規模殺傷性武器的擴散等等</b>
T159	及び <b>テロ対策、多国間犯罪の取り締まり、大量破壊兵器の拡散防止</b> など地球規模の <b>問題</b> にともに対処していく <b>必要があります</b>

以上の例は、原文の中の動詞や助詞などの情報を、訳文の中では非常に遠い位置に後置した例である。S129とS139は1センテンス離れているが、S131とS157の場合は2センテンス、S153の場合は3センテンスも遠くに離れている。このような情報処理方法は記憶にとっては非常に大きな負担となる。幸い、今回の通訳は原稿付の同時通訳であるため、記憶への負担はある程度軽減されるだろう。しかしながら、このように記憶に対する負担を余儀なくされるセンテンスの処理は、日中両言語の文構造・表現方法の差異によってもたらされる通訳翻訳上の最大の難関であるともいえるだろう。

### 3.1.3 非文法的倒訳(Ungrammatical Translation in Reverse Order)

日中両言語間における倒訳は、単に動詞と目的語の位置をひっくり返すといったせまい意味ではなく、句と句、さらにセンテンスとセンテンスのあいだでも逆転を行うというように、広く理解すべきである(遠藤 1989)。その観点から見た場合の、いわゆる「非文法的倒訳」の例は以下のとおりである。

S138	兩國經濟的發展對雙方來說 <b>都是機遇，而不是威脅</b>
T138	両国經濟の發展は、双方のいずれにとっても <b>脅威ではなくチャンス</b> です
T186	這對燈火至今 <b>仍在燃燒，長明不滅，遙相輝映</b>
S186	この一組の燈籠は今なお <b>消えることなく燃え続け、はるか遠くから互いに照り映え</b>

もし「倒訳」を使わずに、T138を原語の順番に従って通訳するなら、「チャンスであり、脅威ではありません」となる。また、T186も同様で、「燃え続け、消えることはありません」という訳語になる。

### 3.2 順送り訳(Linear Translation)

中国語と日本語の動詞の位置はもともと違うため、中日通訳するとき動詞の位置を小幅に移動させることは避けられない。しかし、動詞の位置を除けば、文の全体的構造を変えずに通訳していく訳し方の占める割合がやはり高くなる。例えば以下の例である。

1) 動詞のないセンテンス (Sentence without Verb)

S01	尊敬的河野洋平議長閣下, 尊敬的扇千景議長閣下, 各位國會議員先生
T01	尊敬する河野洋平議長閣下 尊敬する扇千景議長閣下 議員の先生方
S33	中國民主革命的先行者孫中山先生開展的革命活動
T33	中国民主主義革命の先駆者である孫文先生の革命活動は
S37	中日兩國友好交往歷時之久、規模之大、影響之深
T37	中日両国の友好往来は、その時間の長さ、規模の大きさと影響の深さは
S42	眾所周知, 中日兩國人民長達兩千多年的友好交往
T42	周知のとおり、中日両国人民の二千年あまりにわたる友好往来は
S113	《中日聯合聲明》等三個政治文件
T113	「中日共同声明」など三つの政治的文書は
S158	包括能源安全、環境保護、氣候變化、疾病防護
T158	エネルギーの安全など、また環境保全、気候変動、疾病の予防と抑制

S01 と S158 は列挙項目で、動詞はない。S33、S37、S42 と S113 は不完全なセンテンスで、動詞がまだ登場しておらず、次のセンテンスで初めて現れる。上記のように動詞が入っていない例文の訳し方を観察してみると、同時通訳における慣用的な情報処理手法は、やはり順送り訳であるということが分かる。

2) 動詞のあるセンテンス (Sentence with Verb)

S13	在綿延兩千多年的交往中, 中華民族和日本民族相互學習, 相互借鑒
T13	二千年余りにわたる往来の中で、中華民族と日本民族はお互いに学び合い、お互いの経験を参考にしあい
S16	漢字、儒學、佛教、典章和藝術也為日本所吸納與借鑒
T16	漢字、儒学、仏教、律令制度と芸術なども日本に吸収受け入れられ、参考にされました
S25	去年十二月河野洋平議長在中國文化節開幕式上說過
T25	昨年 12 月河野洋平議長は中国文化祭の開幕式で次のようにおっしゃいました
S35	周恩來、魯迅、郭沫若先生等先後在日本學習、生活
T35	周恩来、魯迅、郭沫若先生らの先達もかつて日本で留學生活を送り
S43	曾被近代 50 多年那一段慘痛不幸的歷史所阻斷
T43	かつて近代の 50 年余りの痛ましい不幸な歴史によって断たれたことがあります
S63	把他們從死亡線上拯救出來, 並撫育成入
T63	彼らを死の危機から救い出し、育てあげました
S65	直到今天, 已經有 2513 名日本遺孤返回日本定居
T65	現在までにすでに 2513 人の日本人孤児が日本に戻り定住しています
S73	記載了戰爭剛剛結束不久, 在交通不便、物資極度匱乏的條件下

T73	そこには戦争が終わって間もない頃、交通がまだ不便で物資が極度に乏しかった中で
S102	對此中國人民永遠不會忘記
T102	これを中国人民はいつまでも忘れません

上記の中国語例文には動詞が入っているが、中国語の文の中で動詞がちょうど文の最後に位置しており、そのまま日本語の語順にあわせて順送り訳することが可能である。このうち中国語の SVO 構文を日本語の SOV 構文に合わせる最も典型的な例は S63 の「把字句」(処置文)である。処置文では本来の「動詞＋目的語」という語順が「把＋目的語＋(給)＋動詞」という語順になる。このような例文では動詞が最後に来るので順送り訳に最も適した文型といえる。ほかに S102 のように、強調したい主体を前に出した例文や、S16 と S43 のような受動文も、動詞が最後に位置するので、順送り訳に適した例文である。

### 3) 動詞の小幅な移動があるセンテンス (Sentence with Verb's adjacent Reordering)

S19	與王維、李白等著名詩人結為好友
T19	王維、李白など著名な詩人たちと親交を深めました
S62	飽受戰爭創傷的中國人收留了他們
T62	戦争の苦痛を嘗め尽くした中国人が彼らを引き取り
S64	中日邦交正常以後，中國政府為這些遺孤尋找親人提供了極大的幫助
T64	中日国交正常化の後、中国政府はこうした孤児たちの肉親探しに大きな支援を与えました
S88	中日邦交正常化以來，日本政府和日本領導人多次在歷史問題上表明態度
T88	中日国交正常化以来、日本政府と日本の指導者は何回も歴史問題について態度を表明され
S143	經濟合作與文化交流是連接國家之間的兩條重要紐帶
T143	経済面での協力と文化交流は、国と国とを結ぶ二本の重要な絆です
S145	那麼文化交流的目的是溝通心靈
T145	文化交流の目的は心と心とをつなぐことにあると言えます

上記の例文は、中国語の「動詞＋目的語」を日本語の「目的語＋動詞」に訳した例文であるかのように見える。しかし中国語の「動詞＋目的語」を「動詞＋目的語」のセットとして考え、一方で日本語の「目的語＋動詞」も同様に「目的語＋動詞」としての 1 セットであるものと考えてみると、文の全体的な構造は日本語も中国語もこのセットが同じ位置にくることがわかる。よって「順送り訳」として分類することができるだろう。

#### 4) 判断文 (Predicative Sentence)

S05	這是我第二次到貴國訪問，上一次是在十五年前也是	是在櫻花盛開的四月
T05	今回は私二回目の貴国訪問でございます。前回は15年前、同じく桜の満開の四月	でした
S17	日本人先後十多次派出遣唐使，阿倍仲麻呂便是	其中傑出的一位
T17	また日本は十数回にわたって遣唐使を派遣しました。阿倍仲麻呂はその中のすぐれた	代表者の一人です
S39	這是我們共同擁有的歷史傳統和文明財富	
T39	これはわれわれが共有する歴史の伝統と文明の財産	であります
S52	無論是正面經驗或是反面教訓都是	寶貴財富
T52	プラスの経験も、あるいはマイナスの教訓も、いずれも貴重な財産	です
S94	也是亞洲和國際社會的殷切期盼	
T94	またアジアと国際社会の切実な期待	でもあります
S143	經濟合作與文化交流是	連接國家之間的兩條重要紐帶
T143	経済面での協力と文化交流は、国と国とを結ぶ二本の重要な	絆です
S147	青少年是國家的未來和希望，也是	中日友好的未來和希望
T147	青少年は国家の未来と希望であり、中日友好の未来と希望	でもあります
S151	中日兩國同為亞洲和世界的	重要國家
T151	中日両国はいずれもアジアと世界における	重要な国です
S169	一是以市場為取向的經濟體制改革	
T169	一つは市場経済を志向する経済体制改革	
S170	一是以發展社會主義民主政治為目標的	政治體制改革
T170	もう一つは社会主義民主政治の発展を目標とする政治体制改革	です

「順送り訳」の具体例の中では「判断文」がかなりの比率を占めている。日本語の「・・・は・・・です」の定訳は中国語では一文字の「是」となる。中国語を見て、漢字の「是」が出てくれば、基本的に日本語の「・・・は・・・です」にあてはめればよい。品詞から見ると、中国語の「是」は日本語の「です」に相当し、同じ動詞の役割を果たす。中国語の「判断文」の文構造は SVO という構造であり、日本語の SOV 構造とは異なる。文構造から見れば、確かに「順送り訳」とは言いにくい。ただし、2.1 の定義のところでも触れたとおり、全ての品詞が一対一で対応する場合だけではなく、動詞の位置に小幅の変更があるだけで、大幅な変更・移動がない場合、または他の情報(主語や目的語など)については文の全体的な構造に大幅な変更がない場合は、「順送り訳」と見なすことができる。「判断文」の場合は「是」を表す「です」を文末に移動させればよく、文の中における他の品詞の位置はほとんど変更する必要がない文型なので、「順送り訳」として分類できる。そして「判断文」の中文日訳の場合、「順送り訳」という手法が最も利用しやすいことが、上記の例から読み取れる。

#### 4. 分析結果と結論

今回の分析サンプルの中で使われた「倒訳」「順送り訳」技法は以下の表のとおりである。

表1 「倒訳」「順送り訳」使用回数統計表

技法	細かい分類	センテンス数	百分率	センテンス数	百分率
倒訳	1) 文法的倒訳	120 句	55.05%	134 句	61.47%
	2) 長い文法的倒訳	10 句	4.59%		
	3) 非文法的倒訳	4 句	1.83%		
順送り訳	1) 動詞無し	15 句	6.88%	84 句	38.53%
	2) 動詞有り	32 句	14.68%		
	3) 動詞の小幅な移動がある	25 句	11.47%		
	4) 判断文	12 句	5.50%		
合計		218 句	100.00%	218 句	100.00%

以上の中日原文訳文の対照分析と上記の統計数字データから以下のように結果と結論をまとめてみる。

(1) 一つの例文に複数の通訳技法が入る場合がある

実際に通訳する際は、一つの文に対し必ずしも一つの技法のみならず、同時にいくつかの技法を使い、情報を処理する場合も多いだろう。今回の分析サンプルの総センテンス数は195句であるが、実際に「倒訳」「順送り訳」技法が使われた箇所が218句にものぼるのは、これが原因である。具体的な例は以下のとおりである。

S54	這是一個民族具有深厚文化底蘊和對自己光明前途充滿自信的表現	文法的倒訳
T54	これは一つの民族が深い文化的な伝統を有し、自国の明るい先途への自信に満ちていることの表れであります	順訳：動詞の小幅な移動
S105	基於這樣的客觀事實 兩國領導人就構築戰略互惠關係達成了共識	文法的倒訳
T105	このような客観的な事実に基づいて 両国の指導者は戦略的互惠関係の構築について合意しました	順訳：動詞有り
S136	經過多年努力和積累，兩國經濟相互依存度越來越高	文法的倒訳
T136	長年の努力と積み重ねを経て、両国経済の相互依存度はますます高まりつつあります	順訳：動詞有り
S182	推動建設和諧世界的決心永遠不會改變	文法的倒訳
T182	調和のとれた世界の構築を推進していく決意は、永遠に変わりません	順訳：動詞有り

そもそも、一つのセンテンスに一つの動詞だけが入っているとは限らない。例えば S182 のように連体修飾語が入っているセンテンスの中には動詞が三つも入っている状況が見られる(推動、建設、改変)。たとえ動詞が一つだけの場合であっても、センテンスには他の情報も入っている場合がある。よって、「倒訳」「順送り訳」技法が同時に存在することはありうる。

## (2)「文法的倒訳」が多い

中日両言語の文構造の差異により、倒訳の使用は不可欠なもの、避けられないものであることが今回の分析結果から明確に見てとれる。たとえ文の中の全ての情報を起点言語の語順に合わせようとしても、動詞の位置を変更せずに中文日訳を行うことは無理である。上記の統計の中で、「文法的倒訳」が最も多い割合を占めているのは、まさに中日両言語の文構造の差異に起因する結果である。

## (3)「倒訳」と「順送り訳」の比率

今回の同時通訳の中で、「倒訳」と「順送り訳」の使用はおおよそ 6:4 という比率となる。語順が異なる中日両言語間の通訳においても、通訳技法の使用頻度が一方に偏ることはなく、できる限り交替的に通訳技法を使用しようとする傾向が読み取れる。

## (4)「順送り訳」の使用にふさわしい場面

日本語と中国語では「順送り訳」が絶対に無理なのかというと、決してそういうわけではない。4割ぐらいの訳文は「順送り訳」による情報処理が行われている訳文なのである。「順送り訳」の使用が適しているセンテンスとは、具体的に言えば ①受動文 ②列挙項目 ③判断文 ④把字句(処置文)など、中国語に動詞が入っていない、あるいは動詞が最後に位置するセンテンスである。

## 5. おわりに

「倒訳」と「順送り訳」という通訳手法はまったく正反対の技法に聞こえるかもしれないが、実際の通訳場面では一つの文に対し、同時にこの二つの通訳技法を使う可能性もありうる。両言語間の転換は、ただ単に辞書にある訳語を文法的なルールに従って並び替えるだけ、といった機械的な作業ではない。語彙選択から文の再編集など、複雑なプロセスを経て、訳語を産出したものである。よって、通訳者が実際に通訳するときは、一つの通訳技法に偏って通訳を行うのではなく、いくつかの通訳技法を同時に使う必要が示唆される。

ほかに、同時通訳において最も簡単で、かつ最も愛用される通訳手法は、やはり「順送り訳」そのものであることが今回の分析から見てとれる。「文法的倒訳」と「長い文法的倒訳」は中日両言語の文構造の差異により、不可欠なもの、避けられない通訳手法であると述べたが、さらに詳しく「文法的倒訳」と「長い文法的倒訳」のセンテンスを分析してみると、センテンスの中の情報は、動詞を除き、情報の位置や配列順などはあまり変わっていない、或いはほとんど同じであるということがわかる。「文法的倒訳」と「長い文法的倒訳」が今回の分析サンプルの中でかなりの役割を占めているが、動詞を除いて考えれば、そのほとんどで「順送り訳」が使用さ

れている。よって、たとえ文構造が違って、やはり「順送り訳」が同時通訳において最も汎用的な通訳手法と言えるだろう。

最後に、「順送り訳」の使用に適した文型として ①受動文 ②列挙項目 ③判断文 ④把字句(処置文)などを挙げた。中国語と日本語の通訳の場合のように、文構造が大きく違う言語間では、その文法構造の違いという壁を越えるために、かなりの工夫が必要となる。本研究では具体的な中日対訳例文をまとめ、分析した。本稿の作成によって、今後の中日同時通訳指導・学習の方向性をいくらかでも見出せることを期待する。

.....

**【謝辞】**本稿執筆にあたり、ご協力を頂きました大阪大学の藪田麻夕子先輩に心より深く感謝を申し上げます。

**【著者紹介】**丁紀祥 (Ting Chi Hsiang) 台湾・輔仁大学日本語学科卒業、大阪大学大学院言語社会研究科・通訳翻訳学専修コース博士前期課程修了。現在大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程在学中。

**【注】**

- 1) 原文は中国語で、筆者が自分で日本語に翻訳したもの。
- 2) 加訳とは、原文にない言葉を付け加えて訳すことである。
- 3) 同注 1
- 4) 「逆訳」、「ひっくり返し訳」とも言う。
- 5) 同注 1

**【引用文献】**

日本語：  
遠藤紹徳 (1989) 『中一日翻訳表現文法』 バベル・プレス  
田辺希久子 (2007) 「大学で「順送り訳」を応用した構文解析指導」『翻訳研究への招待』  
125-136. 日本通訳学会翻訳研究分科会  
塚本慶一 (1987) 『中国語通訳一日中通訳者への道』サイマル出版会  
塚本慶一 (2003) 『中国語通訳者への道』大修館書店  
丁紀祥 (2008) 「非即席原稿付き日中同時通訳における日中翻訳手法応用の可能性についての考察」『通訳翻訳研究』第 8 号:379-393. 日本通訳翻訳学会  
楊承淑 (1994) 「定型スピーチにおける論理の展開」『台湾日本語文学報』第 5 号:263-298. 台湾・台北:台湾日本語文研究会  
楊承淑 (1993) 「定型スピーチの構造と論理の展開」『日本語日本文学』第 19 輯:98-111. 台湾・台北:輔仁大学外国語学部日本語学科  
楊承淑 (1994) 「日中逐次通訳から見たリンクの訳し方」『日本語日本文学』第 20 輯:33-98. 台

湾・台北:輔仁大学外国語学部日本語学科

楊承淑(2001)「サイト・トランスレーションの機能と技法」『通訳研究』第1号:21-35.日本通訳学会

林雅芬(2005)「言語行為から見た日中逐次通訳の談話構造」『日本語日本文学』第30輯:

127-155. 台湾・台北:輔仁大学外国語学部日本語学科

中国語:

方梦之(2004)《译学辞典》中国・上海:上海外语教育出版社

永田小絵(1997)〈日中同歩口訳探討〉《翻譯学研究集刊》創刊号:41-66. 台湾・台北:台湾翻譯学学会

林信道(1987)《日語翻譯技巧》台湾・台北:致良出版社

林峻民(2004)《從「順訳観点」看英中同歩口訳:以三篇演説稿為例》台湾・台南・長栄大学大学院翻譯研究科修士論文

侯国金(2003)《同声口訳金話筒》中国・大連:大連理工大學出版社

梅得明(2000)《高級口訳教程》中国・上海:上海外語教育出版社

陸松齡(1996)《日漢翻譯芸術》台湾・台北:台湾商務印書館

彭士晃(1997)《日訳中同歩口訳之訊息处理》台湾・台北:輔仁大学大学院翻譯学研究科修士論文

靖立青(2001)《日漢翻譯技巧》台湾・台北:鴻儒堂出版社

楊承淑(2005)〈同歩口訳的翻譯单位與訊息結構〉《翻譯学研究集刊》第9号:235-268. 台湾・台北:台湾翻譯学学会